

白

色

白

光

びやくしきびやっこう 第19号



“ジョーシキ”を打ち破る

共に学び 友とすごす

※P 8～15に関連特集を掲載しています



「くるまいすユーザー交流会」の様子



「優先エレベーターデザイン&ネーミング公募事業」
におけるデザイン優秀賞の学生の表彰式



ノート、PCテイクの様子



ノートテイク講座の様子

龍谷大学が行う障がいのある学生への支援の基本的な考え方

目 的

龍谷大学は、「建学の精神」の具現化を通して、基本的人権を保障し、多様性を尊重する人間の育成を目指している。本学は、これに基づいて、障がいのある学生の自己決定及び社会参加を促進するとともに、「障害者基本法」の基本理念及び「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」に準拠して、修学支援、学生生活支援、キャリア支援など総合的な支援を行うものとする。これにより、本学の学生が安心して学ぶ環境を整備するとともに、障がいの有無によって分け隔てることなく、相互に人格と個性を尊重し合う共生社会の実現に貢献するものである。

〔2016(平成28)年2月25日〕

人権学習誌『白色白光』^{びやくしきびやくしつ} 第19号 “ジョーシキ”を打ち破る

ジャニーズを描く（作品・作家紹介① 十亀史子）

時刻表で脳内旅行（作品・作家紹介② 中川雅仁）

障がい者アートの魅力

武田佳子がよく笑う（作品・作家紹介③ 武田佳子）

アンカーの伊藤アナウンスです。（作品・作家紹介④ 伊藤樹里）

松本 拓 …………… 2

〈座談会〉 障がいの固定観念を解き放つ

「津久井やまゆり園事件」を問い続ける

にじりゅう 始動

龍谷大学におけるセクシアルマイノリティの現状と

ニーズに関するアンケート報告

人権に関する基本方針

新川 貴大 今浦 真生
名取 絵里 榊田 陽生 …… 8
林 沙彩香 瀧本 美子
西澤 直子
加藤 博史 …………… 16
にじりゅう …………… 20

安食 真城 …………… 22

…………… 26

編集を終えて

加藤 博史 …………… 28

〈表紙 武田佳子「いい子に育ってね」〉

十亀史子

そ
が
め
ふ
み
こ



フォークソングが好きな人

十亀さんはジャニーズが好きだ。中でも嵐の相葉くんが大好きだ。
自慢は相葉くんとのツーショット写真。

十亀さんは似顔絵を描く。

顔の凹凸やシワに合わせて、面取りをして色を塗っていく。

独自に編み出した表現方法だ。

初めの頃は施設の仲間やスタッフの似顔絵を描いていた。とても上手に描けた。

ある時、大好きなジャニーズの似顔絵を描くことにした。上手く描けなかった。

施設の人にはあったシワがジャニーズにはなかった。

ツルツルの顔では面取りができない。

困った。

だから十亀さんは大好きなツルツルの顔にシワと凹凸を描く。

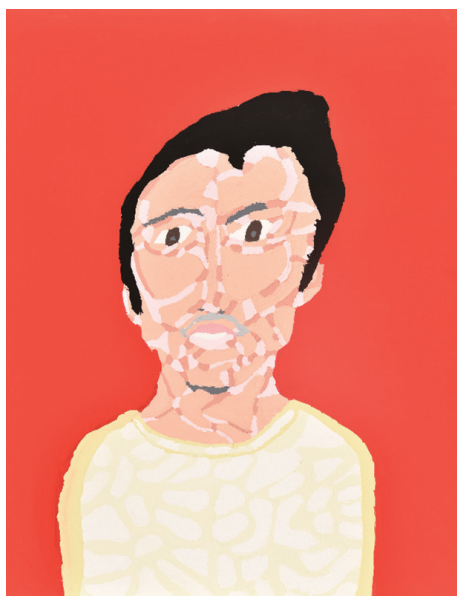
ツルツルをシワシワにして凸凹にする。

とても味のあるジャニーズが現れる。

十亀さんにしか描けないジャニーズ。

十亀さんだけのジャニーズ。

(松本拓)



朝の番組のゲスト



語り「良弁杉」を披露する十亀さん



ショコラティエ



笑顔が似合う人

ジャニーズを描く

時刻表で脳内旅行

中川雅仁

なかがわまさひと

1609 1610 1611 1612 1613 1614 1615 1616 1617 1618 1619 1620 1621 1622 1623 1624 1625 1626 1627 1628 1629 1630 1631 1632 1633 1634 1635 1636 1637 1638 1639 1640 1641 1642 1643 1644 1645 1646 1647 1648 1649 1650 1651 1652 1653 1654 1655 1656 1657 1658 1659 1660 1661 1662 1663 1664 1665 1666 1667 1668 1669 1670 1671 1672 1673 1674 1675 1676 1677 1678 1679 1680 1681 1682 1683 1684 1685 1686 1687 1688 1689 1690 1691 1692 1693 1694 1695 1696 1697 1698 1699 1700 1701 1702 1703 1704 1705 1706 1707 1708 1709 1710 1711 1712 1713 1714 1715 1716 1717 1718 1719 1720 1721 1722 1723 1724 1725 1726 1727 1728 1729 1730 1731 1732 1733 1734 1735 1736 1737 1738 1739 1740 1741 1742 1743 1744 1745 1746 1747 1748 1749 1750 1751 1752 1753 1754 1755 1756 1757 1758 1759 1760 1761 1762 1763 1764 1765 1766 1767 1768 1769 1770 1771 1772 1773 1774 1775 1776 1777 1778 1779 1780 1781 1782 1783 1784 1785 1786 1787 1788 1789 1790 1791 1792 1793 1794 1795 1796 1797 1798 1799 1800 1801 1802 1803 1804 1805 1806 1807 1808 1809 1810 1811 1812 1813 1814 1815 1816 1817 1818 1819 1820 1821 1822 1823 1824 1825 1826 1827 1828 1829 1830 1831 1832 1833 1834 1835 1836 1837 1838 1839 1840 1841 1842 1843 1844 1845 1846 1847 1848 1849 1850 1851 1852 1853 1854 1855 1856 1857 1858 1859 1860 1861 1862 1863 1864 1865 1866 1867 1868 1869 1870 1871 1872 1873 1874 1875 1876 1877 1878 1879 1880 1881 1882 1883 1884 1885 1886 1887 1888 1889 1890 1891 1892 1893 1894 1895 1896 1897 1898 1899 1900 1901 1902 1903 1904 1905 1906 1907 1908 1909 1910 1911 1912 1913 1914 1915 1916 1917 1918 1919 1920 1921 1922 1923 1924 1925 1926 1927 1928 1929 1930 1931 1932 1933 1934 1935 1936 1937 1938 1939 1940 1941 1942 1943 1944 1945 1946 1947 1948 1949 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021 2022 2023 2024 2025 2026 2027 2028 2029 2030 2031 2032 2033 2034 2035 2036 2037 2038 2039 2040 2041 2042 2043 2044 2045 2046 2047 2048 2049 2050 2051 2052 2053 2054 2055 2056 2057 2058 2059 2060 2061 2062 2063 2064 2065 2066 2067 2068 2069 2070 2071 2072 2073 2074 2075 2076 2077 2078 2079 2080 2081 2082 2083 2084 2085 2086 2087 2088 2089 2090 2091 2092 2093 2094 2095 2096 2097 2098 2099 2100 2101 2102 2103 2104 2105 2106 2107 2108 2109 2110 2111 2112 2113 2114 2115 2116 2117 2118 2119 2120 2121 2122 2123 2124 2125 2126 2127 2128 2129 2130 2131 2132 2133 2134 2135 2136 2137 2138 2139 2140 2141 2142 2143 2144 2145 2146 2147 2148 2149 2150 2151 2152 2153 2154 2155 2156 2157 2158 2159 2160 2161 2162 2163 2164 2165 2166 2167 2168 2169 2170 2171 2172 2173 2174 2175 2176 2177 2178 2179 2180 2181 2182 2183 2184 2185 2186 2187 2188 2189 2190 2191 2192 2193 2194 2195 2196 2197 2198 2199 2200 2201 2202 2203 2204 2205 2206 2207 2208 2209 2210 2211 2212 2213 2214 2215 2216 2217 2218 2219 2220 2221 2222 2223 2224 2225 2226 2227 2228 2229 2230 2231 2232 2233 2234 2235 2236 2237 2238 2239 2240 2241 2242 2243 2244 2245 2246 2247 2248 2249 2250 2251 2252 2253 2254 2255 2256 2257 2258 2259 2260 2261 2262 2263 2264 2265 2266 2267 2268 2269 2270 2271 2272 2273 2274 2275 2276 2277 2278 2279 2280 2281 2282 2283 2284 2285 2286 2287 2288 2289 2290 2291 2292 2293 2294 2295 2296 2297 2298 2299 2300 2301 2302 2303 2304 2305 2306 2307 2308 2309 2310 2311 2312 2313 2314 2315 2316 2317 2318 2319 2320 2321 2322 2323 2324 2325 2326 2327 2328 2329 2330 2331 2332 2333 2334 2335 2336 2337 2338 2339 2340 2341 2342 2343 2344 2345 2346 2347 2348 2349 2350 2351 2352 2353 2354 2355 2356 2357 2358 2359 2360 2361 2362 2363 2364 2365 2366 2367 2368 2369 2370 2371 2372 2373 2374 2375 2376 2377 2378 2379 2380 2381 2382 2383 2384 2385 2386 2387 2388 2389 2390 2391 2392 2393 2394 2395 2396 2397 2398 2399 2400 2401 2402 2403 2404 2405 2406 2407 2408 2409 2410 2411 2412 2413 2414 2415 2416 2417 2418 2419 2420 2421 2422 2423 2424			
---	--	--	--

脳内旅行「大和西大寺 ⇄ 赤穂城」



脳内旅行「六条西 5-1-20 ⇔ 日の出橋」



脳内旅行中の中川さん

中川さんは旅をする。
私が中川さんと初めて会ったのは、ちょうど中川さんが
ケネディ空港から成田へ帰国してきたところだった。
中川さんは旅をする。日本を、世界を、飛行機で、
電車で、バスで。中川さんは行きたい時に、
行きたい所に行ける。
中川さんは頭の中を旅する、脳内旅行の達人だ。

中川さんの作品は脳内旅行の予定表だ。
インターネットで入念に下調べ。
数字と文字が交錯する表をつかい心象世界で縦横無尽に
旅をする。

さあ、今日はどこに行こうか。

(松本拓)

障がい者アートの魅力

「薬のカラ」が表現するもの

社会学部実習助手 松本 拓

福祉施設たんぽぽの家の伊藤樹里さんは不思議なアート作品をつくる。大量の薬の包装をバケツ一杯に集めた作品「薬のカラ」（本誌P7掲載）である。ただ大量の実際の薬のカラを展示しただけの作品だが、樹里さんにとってはどれも特別な薬のカラである。これらの薬のカラは自分が飲んでいる薬だけではなく、多くは他の利用者が飲んだものである。樹里さんは施設の仲間が飲んだ薬のカラを集めており、利用者の皆もそのことを知っている。薬を飲む人は樹里さんにカラを渡すために捨てずにとっておく。さらに驚いたことに樹里さんは誰がどの薬を飲むかをすべて覚えており、個別の薬の銘柄（「チャラゼンS」「ムコスタ」「ワーファリン」等々）や薬効までも記憶している。樹里さんはとても記憶力が良い。だから薬のカラの一つ一つが、一人一人の顔と結びつく。

樹里さんのこのような行為は自閉症者に特有のこだわり行動なのかもしれない。おそらく一般的な福祉施設では、こだわり行動は対処すべき事になるだろう。しかし、たんぽぽの家ではアート作品となり、薬のカラ集めは表現活動となる。これは驚くべき事である。我々は誰しもが多くの可能性を有しているが、その大半は潜在的なままで、ほんの一部しか表面化することがない。中でも社会的に認められたカタチでは表面化しやすいが、そのカタチに馴染まない性質は潜在的なままである。たとえば、コミュニケーション能力、行動力、企画力、発想力などは社会的に評価が高く、それらは結び合わされ職業などのカタチになることが多い。その一方で「行動力」のような名前を与えられることがなく、目の目を見ることがない性質はたくさんある。しかしながら、人間の多様な性質の内、ほんの一部し

が顕在化しないことは問題ではない。また社会が我々の潜在的要素を取捨選択することも大きな問題ではない。より深刻なのは我々が社会の用意したカタチしか認められなくなってしまうことである。もし我々が社会的なカタチしか評価しなくなれば、人間の生はとても貧しいものになってしまう。人間の生の豊かさや魅力は表に現れにくい潜在的な部分に由来する。我々はこの潜在的なものを見ていないように、しっかりと見ているし、目の前にないようで、それは常にソコにある。これは何も難しい話ではなく、たとえば「雰囲気」などがそれにあたる。我々は明確な形ではないが、人や物、空間に何かを感じた時に、「雰囲気のある人」とか「場の雰囲気がいい」などと表現する。社会的なカタチばかりにとらわれていると、常に目の前にあり、触れているはずの生の多様な豊かさを感じできなくなってしまう。そうならないために、我々は潜在的な多様性の新たなカタチを見出し続けていく必要がある。そこで注目すべきなのがアートである。「薬のカラ」は樹里さんの雰囲気や多様性を見事に表現している。

作品「薬のカラ」は何を表現しているのだろうか。薬の包装はそれだけ見れば、ただのゴミかもしれない。しかし、無数のカラが集まって一群となると、それはもはやただの薬の包装であることを止める。何とも言えない

存在感を持ち、不思議な雰囲気醸し出す。そして、この雰囲気は樹里さん自身の雰囲気と重なっている。ゴミでしかない葉のカラーも元は誰かにとつての「大事な」葉であつた。かつて「大事」であつたカラーを樹里さんは「大事に」保管する。樹里さんを知っている人がこの作品を見れば、そこに樹里さんと仲間の交流の痕跡を見るだろうし、樹里さんの他人への思いの塊に触れるだろう。また樹里さん知らない人が作品を見たとしても、そこから感じる漠然としたイメージは全て樹里さんへと繋がっている。作品から感じる雰囲気や受け取るイメージは、観る者にとつてバラバラである。それがアートの良い点である。アートは人間の多様性を多様なまま表現できるのである。

「葉のカラー」が表現するものはまだある。実は樹里さんは葉のカラーを集めるだけで、銀色のバケツに葉のカラーを入れて、そこから溢れ出てくるような展示のカタチを考えたのは施設のスタッフである。葉のカラーを毎日集める樹里さんの姿をスタッフが見て、何とかこれをアートにしようとアイデアを巡らせた結果がこのカタチなのである。決して樹里さんが持っている潜在的な性質が自ずとカタチになったわけではなく、スタッフと樹里さんの相互作用のプロセスの中から生まれてきたものだ。樹里さんの個性は表面化している部分



がすべてではなく、スタッフは日々、寄り添うことで、言葉にされない樹里さんの思い、そして名付けることができない樹里さんの魅力を捉え、互いに同調していくことで一つの相互作用体となっていく。これは他者へのケア（配慮）そのものである。「葉のカラー」が生まれた場所は、樹里さんからでも、スタッフからでもなく、両者のアイデアから生まれた

のだ。「葉のカラー」はそのことをよく表現している。またこの点は「葉のカラー」に限ったことではなく、多くの障がい者アートに共通する点でもある。一般のアート作品と比べて、障がい者アートは相互作用の重要性が高い。樹里さんの葉のカラー集めのように、作家本人が作品制作を意識していない場合もあれば、自分一人では筆や道具を持てなかったり、画材を選べなかったりするケースもある。作品を制作する現場の環境を一人で整えることは障がい者にとっては難しい。障がい者アートの創作現場をいくつか見て回ると、ある共通点に気が付かされる。おもしろい作品が生まれる現場では、利用者、スタッフを含めた場の雰囲気がとても良い。これは現場の相互作用（ケア・配慮）がとても上手くいっているからだ。このように障がい者アートの独特な魅力の一つは相互作用の魅力がカタチになっていることである。

美術館で出会う障がい者アート作品もおもしろいが、おそらく障がい者アート作品が最も魅力的になるのは創作が行われる相互作用の現場である。もしどこかで気に入った作品と出会うことができたなら、創作現場にまで足を延ばしてもらいたい。作家や現場のスタッフと出会ったなら、それまで見えていなかった作品の魅力に気づくことができるだろう。

武田佳子

た
け
だ
あ
っ
こ

武田さんはまひがあるため上手くしゃべるのがむずかしい。だが武田さんはよく笑う。

武田さんの作風は変化してきた。妖怪や恐竜などを描く「嫌われ者シリーズ」から、浮世絵、ヌード、仏さんへと順に変化した。

武田さんは、互いに傷つけあう人間が嫌いだ。
人から傷つけられても、人から嫌われても生きている。
嫌われ者にだって美しい魂がある。
だから嫌われ者を好んで描いた。

武田さんは、互いに傷つけあう人間が嫌いだ。
だから武田さんは人間を描くのが苦手だった。
ある日、浮世絵を模写した。描きたかったのは人間ではなく着物。
武田さんの中で少しずつ変わり始めた。

武田さんはもっと自分を表現したくなった。だからヌードを描く。
ありのままの自分を描く。人間のありのままを描く。
人間を描きたい。
だから武田さんは仏さんを描く。

武田さんはよく笑う。満面の笑みを浮かべて。

(松本拓)



満面の笑みを浮かべる武田さん



何処へかえる



女は愛嬌



涙



いい子に育ってね

武田佳子
はよく笑う

アンカーの伊藤アナウンスです。



JURIX WORKS 葉のカラ

樹里さんはNHKのラジオ深夜便が大のお気に入りだ。自己紹介では、決まって「NHK ラジオ深夜便 第1・3・5金曜日担当 アンカーの伊藤アナウンスです」と言う。常に首から下げている自作のネームプレートにはしっかりと「伊藤アナウンス」と書かれている。

伊藤アナウンスの今日のお仕事は「漢字ニュース」を伝えること。樹里さんは漢字を書くのが大好きだ。身の回りの出来事などをノートに書き込んでいく。その時、必ず文字を声に出して読み上げながら書いていく。ニュース原稿は次々に出来上がる。

樹里さんはボイスレコーダーを持ち歩く。自分の話し声や歌声を録音して、繰り返しそれを聞いて楽しんでいる。ある時、誰もいないミーティングルームで樹里さんが独りでいた。誰もいない部屋で何をしているのだろうか？そっと近づいてみた。樹里さんはニュースを声にだし、それを録音していた。誰もいない部屋では樹里さんの声がよく反響し、余計な音が入らない。さながら樹里さん専用の録音スタジオだ。

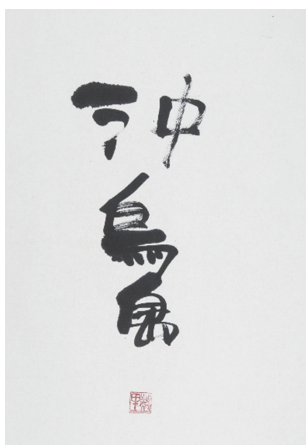
伊藤アナウンスは今日もスタジオからニュースを伝える。

(松本拓)

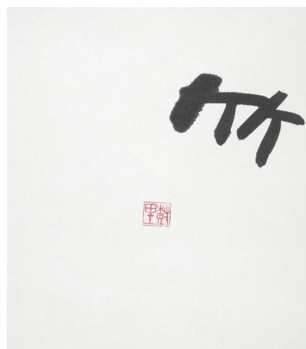
いとうじゅり
伊藤樹里



漢字ニュースを伝える樹里さん



沖ノ鳥島



竹



伊藤アナウンスの名札

座談会

新川 貴大 法学部3回生

今浦 真生 経営学部3回生

名取 絵里 国際文化学部3回生

梼田 陽生 農学部1回生

障がいの固定観念 を解き放つ

林 沙彩香 社会学部4回生

瀧本 美子 障がい学生支援室（深草・大宮）

西澤 直子 障がい学生支援室（瀬田）



写真Ⅱ 後列右から西澤さん、林さん、梼田さん、名取さん、瀧本さん、前列右から新川さん、今浦さん

瀧本 座談会を進行させていただく私から自己紹介いたします。私は深草と大宮の障がい学生支援室のコーディネーターをさせていただいています。深草・大宮キャンパスの支援室には、現在100名をこえる学生が相談に来られています。また先生たちも、「授業でどんな配慮をしたらいいのか」「障がいの状況をもっと理解したい」と支援室に来られます。

障がい学生支援室は2年半前に誕生したばかりで、まだまだ私は半人前なので、龍谷大学の障がいのある学生への支援について、皆さんと一緒に考え、取り組んでいきたいと思っています。そして障がいがあるなしにかかわらず、学生同士が理解し合って、更に良い大学になるような取り組みをもっと進めること



瀧本美子さん

ができればいいなと思っています。

西澤 私は瀬田の支援室のコーディネーターです。今、瀬田キャンパスでは約50名弱の学生が、支援の申出をされています。瀬田キャンパスの特徴として、キャンパスがすごく広く、かなり段差もあって、車椅子の学生であれば、移動にとても時間がかかるという、ハード面の問題があります。また瀬田のもうひとつの特徴は、聴覚障がいの学生が多いということです。私は支援室にきてまだ1年半ですが、聴覚障がいの学生のノートテイクのスタッフとして登録している学生と共に、支援の活動をもっと広げていきたいと思っています。

瀧本 では順番に学生のみなさんから、障がいの状況を中心に自己紹介をお願いします。新川 僕は今、法学部3年生です。僕は脳性麻痺という障がい、生まれたとき脳に酸素がいかず、運動機能が損なわれました。今日は、よろしく願います。

名取 国際文化学部3年生です。私は生まれたときは健聴者で、10歳のころにおたふく風邪で右耳が、さらに16歳のころから左耳の聴力が落ちていきました。ですから私は健聴のときと片耳が聞こえないとき、両耳の難聴と、いろんな世界を経験してきました。

今浦 経営学部3年生です。私の障がいは、シャルコー・マリー・トゥースという病名で、

末端神経の機能が失われていくもので、障がいの程度に個人差があり、進行具合にも波があつて、とまっているときもあれば、自分でもわかるくらい進んでいるときがあります。

榊田 僕は瀬田キャンパスの農学部1年生で、「感音性難聴」という聴覚障がいです。僕の場合は人工内耳で、頭のなかに機械が入っているという状態です。生まれたとき耳は普通で、インフルエンザで聴力が下がり、今に至っています。

林 社会学部の4年生で、瀬田キャンパスで学んでいます。今日はお二人の手話通訳をさせていただきますが、どのようなお話が出るか、楽しみにしています。

障がいに対する固定観念とは

瀧本 ありがとうございます。皆さんはこの約20年の人生の間に、いろいろ悩んだり苦しんだりされたことも多かったと思います。今日の座談会のテーマは「障がいの固定観念を解き放つ」というものですが、これはなかなか難しいテーマです。そこで固定観念って何だろう、どうしてできるのかと自分なりに考えてみると、現状や現実を知らないということが、固定観念をつくる大きな要因になっていると思います。ですから今日はみなさんに大いに語ってもらって、ぜひまわりの

新川貴大さん



人に自分たちのことをしっかり知ってもらうことが重要だと思っています。でも、みなさん自身の中にも固定観念ってないですか？ 固定観念を持ちながら、まわりの人の固定観念を解き放つのは、並たいていなことではありません。まず、皆さん自身の中に強いこだわり（固定観念）があつて、一歩進めなかつたときの経験や、それを乗り越えていくような転機になった体験があれば、お話しただけじゃせんか。

新川 そうですね。障がいの固定観念を解き放つといえ、社会との認識のズレかなと。社会の中に大多数の健常者といわれる人がいて、その人たちができることができないというの、障がいということだと思います。

瀧本 だから新川君は大多数の健常者に一生懸命に合わせようという人生を送ってきましたね。ところが大きな転機が訪れることになったというお話を以前聞きました。新川君が「車椅子ユーザー交流会」をしようとみんなに声をかけ、その交流会で話してくれた内容をここでもう一度ご紹介ください。

新川 僕の実家は兵庫県で、18歳の夏休みものとき、大学生になるにあたって一人暮らしをしたいなと思っていたとき、高校の先生のすすめで地域にある自立生活センターを訪れました。そして、どうすれば障がいのある人間が自立して生活をするかということを、いろいろと学んだのです。これが僕の大きな転機になりました。

つまり障がいに対する認識、障がいの受容ということでしょうか。当時、僕は大多数の人に合わせようと必死でした。がんばれば何とかなると。それしか生きる方法を知らなかつたのです。でも、その自立生活センターの方から、「障がいがあつて自分で満足にできないのは当たり前。介助者に手伝ってもらい、自分のやりたいことをする」と。たとえば、2時間かかって自分で服を着る。しかし、介助者に手伝ってもらつて30分で着ることができれば、残りの1時間半も自分のやりたいことができるんです。自分ですべてやるのと、手伝ってもらうということには、どちらもメ

リットとデメリットがあると思いますが、手伝ってもらうことで1時間半も自分がやりたいことができるのだと。そういう話を聞いてすごく気持ちが楽になりました。

また、介助のヘルパーさんに物事を頼むときは、その発言に責任をもつということも、その自立センターで学びました。

瀧本 皆さん、今の新川君の話をきいて、どう思われますか。

榊田 たしかに自分でやろうとしたらできるけれど、そのぶん自分で他にしたいことが犠牲になる。耳が聞こえにくい人間からすれば、もうすこしゆっくり話してくださいとお願いするということですね。

瀧本 こうしてほしいと、自分の意思をしっかりと伝える。

榊田 ええ。仲良くしてくれている人には、自分の障がいの様子を伝えて、徐々に友人関係を深めていきたいと思っています。

名取 私はかなり喋れるから、まわりの人に耳が聞こえていると思われれます。あるとき駅員さんに、「私聞こえにくいので書いてください」と言ったら、喋るだけで何もしてくれなかつたことがあります。駅には耳マークがあり、筆談しますと書いてあるのに。でももし、私が聞こえませんと紙に書いて出したら、対応が変わっていたかも知れません。やっぱり世間一般では、「聞こえないイコ

「喋れない」という認識があつて、「喋れても聞こえない」という事実を、私たちはもっと広く伝えていかねばならないと痛感しました。聴覚障がいには「見えない障がい」とよく言われるのですが、そういう障がいがあることを広く知ってもらふ努力をしなければならぬと思っています。

瀧本 たしかに「聞こえないイコール喋れない」という固定観念がありますね。

名取 さきほどの駅員さんの対応に腹が立ちましたが……。

瀧本 そうですね。でも、腹を立てながら、もう一度気持ちを切りかえて、そのことをわかってくれる社会に変えていこうとする。そんな気持ちの立て直し作業の連続ですね。



名取絵里さん

ところで名取さんは留学しましたね。

ある人となない人を分断する社会

名取 はい、フィリピンへ1ヶ月間。

瀧本 どうでした。困ったことは？

名取 いっぱいありました。まず、歩く人間のための道がないんです。猛スピードで行き交う車を避けながら、ひやひやして歩かないといけない。これは日本でも同じなんです。補聴器をつけていても、どこから自動車が発生しているのかわからない。車が右から走ってきているのか左からか。フィリピンでは、他の人は簡単に道をわたっているのですが、私にはそれができなくて困りました。

留学のとき事前に私の耳のことは伝えていたのですが、向こうの人は障がいのことについてあまり知らなくて、補聴器を見ても「これ何？」ですね。でも、先生に私の障がいにについてお願いし、おかげでみんなと同じように勉強できて、本当にいい経験でした。

瀧本 日本と違うなと感じることは？

名取 やっぱり人々の意識が違いますね。たぶんフィリピンでは障がいを持っている人と持っていない人が、完全に分かれて生活していると思いました。だから私がフィリピンにいた1ヶ月間、障がいをもっている人と会うことがなかった。たぶん障がいをもっている

人は道路も歩けないし、本当に別々に生活しているのでしょう。別々に生活することがいいことなのかわかりませんが、日本ではそうじゃありません。もっている人ともっていない人が一緒に生活するという思いがあるから、お互いがもう少し一緒に過ごしやすい社会になるよう、努力しないといけないですね。

瀧本 日本でも昔は障がいがある人となない人が別々に生活していた歴史があります。それを障がいをもっている人たちがやその家族、理解のある人たちが力を出し合つて、社会に少しずつ訴えていって今、私たちはここにいます。そのことについて新川君は、何か言っていますね。

新川 名取さんが言っていたように、発展途上国などではそういう国が多いのかなと思いました。僕は海外へ行ったことはありませんが、自立生活センターに関わっている人から、海外でも自立支援ということで、日本からスタッフを派遣して取り組んでいると聞きました。国によっては人里離れたところに隔離されているというのが現状なのでしょう。

今、日本は福祉の制度が確立されて、僕らも福祉のサービスを受けることができるのですが、制度が整っていなかったときは、障がいがある方や自立支援をする団体の方々、役所に交渉に行ったり、デモ活動をしたりして、自分たちの生活をもっと良くしようとさ

榊田陽生さん



れた。だから徐々に制度が整えられていったというお話を、僕はよく耳にしました。

瀧本　すごく長い歴史の中で、いろんな苦しい思いとか、わかってもらえないくやしさを、みんなでつながり合って、乗りこえてこられた。新川君が言っているように、私たちは過去からのバトンをもらっているということですね。そして、名取さんがさきほと言っていたように、自分たちが次の社会をつくっていくと。社会という言葉が大きすぎるのなら、この龍谷大学がどんな大学になったらいいか、漠然としたものでも具体的なものでも、みなさんどう思いますか。そのあとに、では自分たちにできることって何かなという話も、お願いします。

喋り合う機会をつくることこそ

今浦　具体的には、深草キャンパス21号館のエレベーター問題です。21号館は6階まであるので、みんなエレベーターを利用します。でも21号館のエレベーターは狭く、私たち車椅子の学生が乗ろうとしても、なかなか乗れないのです。

龍谷大学は学生数が多く、同じ大学の同じ学生なのに知らんぷりとまでは言いませんが、何か他人行儀です。高校のときだったら、みんな「おはよう」と声をかけ合ったりしていたのに。同じ大学の同じ仲間だという意識をもってほしいと思います。だから同じ仲間だということから思いやりの心をもつて、車椅子が入るスペースを譲ってほしい。そういう苦労があるということを私たちも、もつとしつかり発信していくべき立場なのですが、やっぱり遠慮してしまします。どこかに頼むことがいけないことだという意識があつて。瀧本　21号館のエレベーター問題の解決を図ろうとする取組のひとつが今年度実施した「優先エレベーターデザイン&ネーミング公募事業」でした。この事業は、車椅子ユーザー交流会で出された意見が発点になっています。これは、ひとつの発信例だと思いが、どうすれば発信しやすいのでしょうか。

今浦　まずは障がいを持っている当事者同士で意見を交わし、どんなことで困っているかなど、話し合うことが大切だと思います。そして福祉にまったく興味のない学生にも、当事者側の意見をもつと伝えることで、理解を深めてもらえる。もちろん理解しなくても、どうしたらいいのかわからない人もいるし、理解したくないという人もいます。だから、理解したくないという側からの意見や考えを、私たちがもつと知るべきだろうと思います。

瀧本　たしかになぜ理解したくないのと聞いてみたいし、大学が他人行儀ではなく、親しく交わることでできる空間になったら、みんなが楽になる。自分とは違う立場の人同士が意見を交換し合って、つながっていく。

榊田　僕はみんなともつと喋る機会をつくりたいと思っています。僕のまわりの聴覚障がい者は、最初はろう学校に通っていて、中学校の途中ぐらいから健常者の学校に移るということが多かったのですが、僕の場合は保育園からそのまま健常者の人と一緒に小学校、中学校に通っていました。保育園で仲よくなつて、そのまま小学校、中学校に上がつて、だから僕は障がい者という意識がありませんでした。ところが高校へ行くと、いろんな地域から生徒がやってきて、自分が障がい者だという意識が、少しずつ生まれるようになってきました。

聴覚障がいというのは、僕の中ではコミュニケーション障がいだと思っています。小学校や中学校のときに一对一で同じように喋っていた僕が、知らない人が大勢いる中で喋るようになったとき、僕はついていけませんでした。みんなが笑っているとき、僕はなぜ笑っているかわかりませんでした。だから高校3年間は淋しい思いをしながら、積極的に話の中に加わることをしなくなった。そのことが、大学生になってからわかったのです。

一对一では喋れるけれど、大勢になったらどうしようかと、大学生になってちよつと不安でした。でも龍谷大学には僕のような障がい者が大勢いることを初めて知ったことで、手話も始めましたし、もっと積極的に喋る機会



今浦真生さん

をつくろうと思うようになりました。高校でのつらい経験は、無駄ではありませんでした。瀧本 地域にいるときは、近所で生活しているから、あまり意識せずにお互いのことを知っていたのです。大学は、入学して初めて出会う場だからこそ、一緒に喋ることでもつとお互いが知り合う場があったらいいなということです。じゃあ、これからみんなで、そういう場をつくりましょうか。

名取 私は榊田さんとは違う深草キャンパスで、ノートテイクを使って授業を受けているのですが、瀬田には社会学部があつて、ノートテイクに関しては過去の卒業生のみなさんの取り組みが現在にも引き継がれており、ノートテイクしてみたいとか、しようと思っている学生が多いように思います。また、障がいのことについて勉強したいと思っている学生も多いと思います。しかし、深草は、まったく福祉に関心のない学生も多く、どうしたらノートテイクをやってみたいと思ってくれるようになるのでしょうか。

やっぱり私たちの存在をアピールしないといけない。福祉に関係のない学生も今後、障がいのある人たちと関わりをもつ機会があると思います。もしそういうことがなくても一人の人間として、障がいをもつ人への理解を深めてほしい。そのためには私たちが、助けたいということのを伝えないと、始まらな

いと思います。

瀧本 深草は人数も多いし、今浦さんが言ったように人間同士の関係に距離があるようですね。だから、みなさんが思っていることや伝えたいことを、支援室も一緒になって学内に知らせていきたいと思っています。また、福祉を学んでいる学生たちの思いとか気持ちを、深草や大宮に届けることができれば、それも大きな力になりますね。

伝える、感じ合う、お互いを理解する

林 私は福祉を学びたいと大学に入った人間なので、障がいのある方たちが困ったこととか、変えてほしいなと思うことを、私も一緒に考えたいし、そういうことに興味があつたからからこそ、龍谷大学に入りたいと思いました。みなさんがさきほどからおっしゃっていたように、知らないとか興味のない人たちにどう伝えることができるか、ですね。私は障がいがない人間なので、みなさんとまったく同じ気持ちだとは言えませんが、お話を聞いてすごく共感しました。

瀧本 共に話し合う場をつくっていくことが、これからの大切な方向だと、みなさんのお話を聞いていてよくわかりました。最後に、これだけは言っておかないと今夜は眠れない(笑)ということ。



新川 僕も自分たちが伝えていくということ
がすごく大事だと思っていて、日頃から意識
してSNS、ツイッター、フェイスブックな
んかで発信しています。それによって今まで
関心のない人に届くかもしれないし、届いた
人が友達に、今こういうことが問題になっ
ていると話してもらえるかもしれません。

この座談会で名取さんが「見えない障がい」
とおっしゃいましたが、僕らは目で見てよく
わかります。ですから障がい者同士であつて
も、もつとといった学び合うことがあるのだ
ということ、すごく感じました。ぼくとは
異なった障がいをもった人のことを、もつと
わかりたいと思いました。それと共に、根気
強く折れないで情報発信するしかない、僕

は思います。

今浦 私のように車椅子に乗っている人間だ
けでなく、聴覚や視覚、そして精神の障がい
のある人もおられます。すべてを理解するの
は難しいと思うのですが、自分の障がいのこ
とを身のまわりの人たちに伝えていくこと
で、ちよつとでもよくなるのだと、あらため
て思いました。

それと、もし私が明日歩けるようになった
ら、その満足感や幸福感がいつまで続くかと
いうと、すぐに歩くのが当たり前という感覚
になるでしょう。今、不満だ不便だと思い悩
んで落ち込んだりしていることよりも、私は
本を読むのが好きなので、本を読んだり心温
まる音楽をきいて楽しむ。不便なことを克服
したって、決して楽しいことばかりにならな
い。それよりも幸せになることをいっぱいし
たいと、このあいだちらつと思いました。

瀧本 自分の心の中で、幸せをつかんでいき
たいということですね。

今浦 はい。進行性の障がいでも悩むこともた
くさんありました。楽しいことをいっぱい
やって、前向きに生きる、そのことを伝えな
いと今日は眠れない（笑）。

瀧本 今浦さんをはじめ、みなさんのように
一生懸命に人生を歩んでいる若者たちの存在
は、素晴らしいことです。この社会にとって
も、ものすごく大きな力だと思います。

榎田 今浦さんがおっしゃったように、障が
いを取りこえて幸せになるのは、大事なこと
で、それが夢ですね。そして、名取さんのお
話のように、アピールする力が必要だと思
います。ですから大学の講義のとき、僕は一番
前の席に座ります。最初は少し気にしていま
したが、目立つことによって同じ講義を受け
ている学生から話しかけられたり、社会学部
の学生から「私たちでも、農学部学生のノ
ートテイクができるの？」と、たずねられた
ことがあります。そして手話を広めたいと
いうことから、悪い例かもしれませんが、授
業中に手話で雑談をしたり（笑）。こちら側
も自然な形でやっていたら、それがアピール
にもつながると思います。

名取 今日のテーマの固定観念ということ
ですが、私は国際文化学部で発展途上国と先進
国の違いを勉強していて、一般にブラジルと
いう国は発展途上国だと思われています。で
もブラジルの大都市を見ると、途上国とは言
えない。一方、ブラジルの中でもすごい経済
的な格差があったり、目に見えない問題がい
っぱいあって、深く深く見ていかないと本当
のことはわかりません。深く見ていくときに
私が注意しているのは、偏見をもたないとい
うことです。障がいについても同じです。こ
の障がいはこうだという固定観念をもたない
こと、一人ひとり違うんだということを意識

して、その人のいいところを見つけていきたいと思っています。

瀧本 本当にそうですね。

林さん、長時間の手話通訳、ご苦労さまです。何か感想を。

林 手話をさせてもらうのが久しぶりで、支援室の西澤さんから、「手話通訳どうですか」というお話をきいて、できるだろうかと心配していましたが、今までノートテイクをさせていただいたり、手話サークルを通じて今日出席のお二人のことは知っていて、手話通訳が自然にできて、すごくほっとしています。

手話は声でのコミュニケーションとは違いますが、手話を通じて仲良しになったお二人



西澤直子さん

や、支援室のコーディネーターさんと知り合いになりました。また、こうした席に参加することができ、私にとつてすごく身になる座談会でした。私が知らなかったこと、みなさんが困っていること、伝えていくという決意などを聞かせてもらって、これからの私の人生に役に立つというか、本当にためになるお話を聞くことができてよかったと思っています。

西澤 今日みなさんのとてもいい話を聞かせてもらって、ひたすら聞き入っていてあまり発言できずごめんなさい。でも、とても濃厚な時間を過ごさせてもらいました。ありがとうございます。

龍谷大学は、様々な困難を抱えた学生が学んでいます。多分みなさんがこれからの人生で、これほど様々な障がいを持つ学生と関わる機会はないと思います。今日の話でもありました、いろいろな人の話を聞きたいという思いに通じると思いますが、様々な困難を抱える学生と話し合ってほしいと思います。そのために障がい学生支援室をどんどん利用してください。そこで学んだこと共感したことが将来の皆さんの糧となると思います。支援室はみなさんを応援しています。

瀧本 今日の座談会で繰り返し話されていたことは、意思を伝えるということの大切さ、そして人間は一人一人違うので、お互いを知

ることから全ては始まるということでした。私は日頃、障がい学生支援室で、学生から相談を受けていますが、悩み苦しんでいる姿をたくさん見えています。「一日を終わらせることだけを考えてこれまで生きてきた」と言った学生、「誰よりも努力しているのに、もっと頑張れと言うのか」と泣いていた学生、「やっぱり障がい者は切り捨てられるのか」と呟いた学生、どの学生もとても頑張り屋で、外では笑顔を絶やさず懸命に生きています。

この座談会で、みなさんがつらいことや苦しいことを抱えながらも、自分の意志を周りに伝えて理解してもらおうこと、そして社会に理解者を増やしていくこと、それらの積み重ねで新たな社会をつくっていききたいと思っています。いることがよくわかりました。

でも今浦さんが言ったように、一人では心が折れそうになるので、みんな仲間になって手をつないで前に進んでいくということが、すごく大事だと思いました。

支援室は学生たちが、理解し合える環境づくりを応援していきたいと思っていますので、今日の出会いを大事にして、明日につなげていきましょう。みなさんに勇気をもらいました。ありがとうございます。

「津久井やまゆり園事件」を 問い続ける

― 恥ずべし傷むべし、わが内なるA ―

短期大学教授 加藤 博史

はじめに

昨年7月26日、戦後最大の殺人事件が起きました。数時間の間に19人の知的障がいを持つ人たちが福祉施設内で一方的に刺し殺され、26人が重軽傷を負わされるというものでした。犯人とされるA（26歳）の動機は殺害対象者への憎悪でも社会に対する憤懣でもありませんでした。

Aは、3年以上この福祉施設に勤めており、数年前から「障がいがあると家族も周囲も不幸にする。また養護に費用がかかり税金の無駄使いでもある。障がいのある人を殺すことは、不幸を減らし、日本のためになる」との

信念を持っていたとされています。

Aは障がい者を大量殺害する計画を立て、衆議院議長や首相宛の手紙で予告を行ない、また、勤めていた施設でも「障がい者を安楽死させること」を容認する話を出したため、2月19日、施設は警察に通報し、警察は「人を傷つける虞がある」と判断して、精神鑑定のための通報を相模原市長に行ないます。医師の「非社会性パーソナリティ障害」、「妄想性障害」などの診断により、Aは措置入院（知事による強制的入院）となりましたが、3月2日には、「他人に危害を加える虞がなくなった」と医師が判断し、わずか半月足らずの入院で退院となりました。それから5ヶ月足らずの後、Aは準備を整

えて深夜に施設に潜入し、数時間で大量殺戮を実行したのです。

そして事件後、インターネット上では、「Aの犯行を賞賛し、優生思想を賞揚する」書き込みが匿名で多数見られたとのことです。

これだけでも衝撃的ですが、被害者名は遺族の意向を汲んで公表されることは、ほとんどありませんでした。つまり、障がいのある身内の名前を公表することを憚らせている社会の力が働いているのです。この社会の力の変革こそわたしたちの課題でしょう。

事件後、マスメディアは、高校野球とリオデジャネイロ・オリンピックの報道に明け暮れ、その情報洪水の中で、この戦後最大の殺人事件は人々の記憶から忘れ去られていきました。社会にとっては「変人による犯罪」として片付けてしまいたい事件であり、論評は主に優生思想批判に終始しました。

この事件後の一連の出来事によって皮肉にも、障がい者の生命が、今日の日本社会でいかに軽く認識されているかが如実になったといえます。

**家族にとって障がいのある
子どもがいることは不幸か**

大阪市立大学大学院教授である要田洋江は「ダウン症児の親子教室」で、障がい児を持つ親や祖父母にインタビューし、多くの率直

な「語り」と「語られ」を収集しました（『障害者差別の社会学』岩波書店、1990）。それは、次のような、周囲の突き刺さる棘に包囲された親たちのうめきに似た声です。

「何でこんな子を産んだの」、「死んで生まれたら良かった」、「障がい児の親になるなんて嫌」、「誰かにこの子をあげたい」、「顔をみるのもいや、抱けない」、「顔つきが異様なんです」、「望まれない子」、「この子を育てる自信がなくなった」、「私が何か悪いことをしたというの」、「どうして羊水検査しなかったんやろ」、「これ以上迷惑かけたくない」、「親戚にそういう子どもはいないといわれる」、「こんな子を産んだのは私の責任」、「この子と一緒に死ぬの」、「この子はこの世の中で生きにくい」。

以上は、母親たちが精神内部に取り込んだ、凄まじいまでの《排除の言説》です。Aが偏執的に取り込んだ言説も同じ背景から来ています。要田は、いまの社会が障がいを持つものを排除する形で成り立っていることを指摘し、この社会システムを変革して、新たな社会システムを作りあげていかねばならないことを強調しています。その社会変革の内実は、単に、ソーシャル・サービスを充実し、社会参加を促進し、経済的活動や文化的活動を盛

んにすることにとどまるものではありません。

それは、より本質的には、今日の社会の価値観の方向を変えることであり、もう一つの価値観を導入して価値観の多元化を進め、管理競争的価値観の弱毒化を図ることといえます。

稼得的生産効率や利潤成果を追求する社会の価値観が、今日の社会の中心を占めています。これと対峙する人間観は、「ハビング（容姿や能力や地位や金銭など持っているもの）」や「キャン・ドウイング（努力してできること）」を至上価値とするのではなく、その基盤に、「ビーイング（生きていることそのもの）」や「ビカミング（感謝や分かち合いなど生きていく姿勢）」の人間観をもつことであるといえます。

壊れていくと同時運動して 再生される人間の絆と心

ノーベル賞作家である大江健三郎（1935）は、1958年芥川賞を受賞し文壇の寵児となりました。1960年結婚し1963年6月長男が誕生します。長男は瀕死の状態で生まれ、しかも生存が困難な状態が夏から秋にかけて続きました。「双頭」と思われるほどの大きな肉瘤が頭にありましたが、手術が成功し、現在、長男は知能の障害をもちながらも音楽の才能を開花させて元気で活躍しています。大江は、異常な長男誕生の衝撃を作品にまとめ、翌1964年、「個人的な

体験」という表題で上梓しました。

小説では、将来大学教授を嘱望されている「バード」とよばれる男が主人公になっています。バードの子は脳ヘルニアと当初診断され、病院の院長はクスクス笑って「非常に珍しいケース」と告げます。バードは、育てる自信がなく、妻に子を見せられず、義母と相談してミルクを少ししかやらないようにして衰弱死を進めるのです。

しかしバードは、苦悩の果てに、「おれは赤んぼうの怪物から、恥しらずなことを無数に積み重ねて逃れながら、いつたいなにをまもうろとしたのか」と問い、子に手術を受けさせようと決心します。バードの女友達は、「手術して赤ちゃんの生命を救ったにしても、それがなんになるの？ かれは植物的な存在でしかないといったでしょう？ あなたは自分自身を不幸にするばかりか、この世界にとってまったく無意味な存在をひとつ生き延びさせることになるだけよ」と彼をなじります。植物的存在は「無意味な存在」であると言い切られているのです。まさに、Aの展開した論理と同じだといえます。

手術は成功し、それが肉瘤だったことが判明します。その後バードは、「ぼくは、予備校や大学の講師という、一応上向きの段階のあるキャリアとはすつかり縁をきるつもりなんです。そして、外国人の観光客相手のガ

イドをやるうと思います」と述べ、妻の腕に抱かれた「赤んぼうの瞳に、自分の顔をうつしてみよう」とするのです。

ここには、一般的な優生思想に支配されて生きる人の心とともに、それをのりこえ、赤んぼうをケアしようと心を開き、赤んぼうによって自己実現されていく大江の姿が鮮やかに描かれています。優生思想の背後には効率主義や立身出世主義があり、それと対峙するのは、生きることの意味を問う力、および人を傷つけたことを懺悔する力でしょう。

それから30年後、大江は、家族全体のケアしあう力を取り上げて、「恢復する家族」というエッセイを発表しています。団欒の中心であった義母が、認知症のために、居間に出て来れなくなり、玄関のドアをわずかに開けて家の前を通る人を見張るようになり、さらに雨の日も3〜4分ごとに玄関から門の間を往復するようになるのです。

そのような日々のなかで大江は次のように思いをいたしました。『しかしそうした家族の日々の変化のなかで、たえまなくなにものが壊れているにしても、それと結んで恢復し、再生してゆくものへの思いもあるのだ。おばあちゃんの知的な後退は、時に老人性痴呆の解説書で見る脳の間の隙間の写真が示すように、もう決して恢復しえぬものであるのだろう。それでも、きわめて長いレインジで

見れば、なおかつあの後に恢復があつた、自分らはみなそのような恢復のなかで生きてきた、と回想しうる時も訪れるのではないか？ その長いレインジのものの見方を学ぶためにこそ、この世で生きているとき、感じる』（大江健三郎「恢復する家族」講談社、1995,p.100-101）。

この世で生きている目的は、長く広い視野のものの見方を得て、壊れていくと同時に再生される家族の絆があることを識っていくことである、と大江は述べています。

『自己の内なる《悪》』の自覚の必要性

日本屈指の精神医学者で臨床医の中井久夫は、西欧の人々の他罰的傾向の背景に、『自己の内なる《悪》』を抑圧する文化の存在があると、次のように語ります。

『他罰的に外部に悪を見出すものは、自己の内なる悪から目を逸らし、抑圧し、外部に投影する傾向がみられる』『意識していないこと』は、神に答責できないものであり、そういうものが自分の中にあることは大問題である。したがって、無意識は外部に投射される傾向にあつて、かつては悪魔となり、現在も自己を正義として、「悪」を外部に探す傾向（すなわち他罰性）が著しいのではないか。（中井久夫「西欧精神医学背景史」みすず書房、

1999年,p.222-223）』

他罰性を克服するためには、自己の内なる「悪」に向き合い、受けとめ、受け容れる必要があります。

『悪』の抑圧は、自己中心の文化傾向と連動しています。中井久夫は、『ルネサンスにおいては、「宇宙」のほうがはるかに問題であった。』とし、かつ、英語史で「セルフ、自己」という単語が続出するのは、16—17世紀のことであることを指摘し、西欧における自己肥大、自己中心化の文化の始まりを、宗教革命後のこととして次のように語っています。『神の前にただ一人「自己」として立つというピューリタニズムは、次第に「自己」を肥大させたのではなからうか。そして、神が次第に遠のくとともに、肥大した自己だけが残った。（前掲書、中井、1999,p.153）』

この自己の肥大の文化によって、個人の尊厳の思想が生まれました。しかし、その自己は、「宇宙性、コスモロジー」を排除したものでした。

『悪』の抑圧は、「怠惰者・狂人・病者」の排除とシンクロナイズしています。コスモロジーを喪失し、心の内なる迷宮下降の想像力を劣化させた現代人は、理性で判断できない世界を認めることができず、その結果、反理性的なものを駆逐するか、管理するシステムを築いていきます。中井は次のように指摘し

ています。『進歩とはなかんずく、邪悪なるものの排除であつた。この観点からする時、魔女も、働かざる者も、理性をもたざる者も、伝染病者も、いな病いもその原因たといえば細菌も、医学においても看護においてもひとしく排除清掃されるべきものであつた。』(前掲書、中井、1989p.167)

障がいのある人、精神のバランスを崩した人、病者と共に生きていく社会を築こうとすれば、『悪』をわが心のうちに見つめ、『悪』と対話し、表現していく必要があるといえます。

《悪》を体験的に学習しておく必要性

中井の指摘と重なるが、京大教授で文化庁長官も務め、優れた心理臨床家である河合隼雄は、人間が育つ過程で、根源的な《悪》を体験しておくこと、その怖さを身に沁みて知っておくことの必要性を説いています。

『悪が一定の破壊の度合をこえるときは、取り返しがつかないことを、人間は知っていないでなくてはならない。(中略)このことをよく心得ていると、大切なときに踏み止まることができる。それを可能にするためには、やはり、子どものときに何らかの深い根源悪を体験し、その怖さを知り、二度とはやらないと決心を固くすることが必要である。(河合隼



雄「子どもと悪」岩波書店、1997年 pp.56-67」

子どもに《悪》の体験をさせ、その体験の反省的吟味から、『悪』を受けとめさせ、人格統合に資するには、河合は、支援者や親が、もう少し「不安と向き合い」、「悪を体験する」必要性があると指摘しています。本当に寛容で優しい人というのは、根源的な悪と根源的な不安を体験し、苦悩した人に他ならなりません。

人のつながりが断ち切られ、カプセルに入ったように個々が生きていく、いわゆる「無

縁社会」では、個々の人が持っている弱点がカバーされず、かつ活かされず、あからさまに露出することが多いといえます。誰でもが、弱点をもっているのです、それをことさら否定する必要はなく、逆に、弱点こそ、創造性の動機や契機になったりします。弱点が相互にカバーされ、いくつが集まることによって、とてもない創造性につながることもありま

す。問題は、個々の弱点にあるのではなく、分断にあるといえます。さまざまな形で縁が生まれる機会を提供できる社会、「創縁社会」を実現していきたいものです。

そして政策的には、収容施設での集団的処遇を無くして、在宅でのサービスを充実し、社会参加を拡げて、ノーマライゼーションを大胆に推進していかねばなりません。わたしたちの日常の暮らしを開き、その中で葛藤を何度も乗り越えて障がいのある人と触れ合う実践こそ、いのちは補い合いつながっていることを教えてくれるものでしょう。

わたしの内にも棲んでいる。障害者差別をするAに恥じいり、心を痛め、環境に恵まれて人殺しをせずに済んでいるわたしの今日一日の縁に感謝し、感謝を表す意味でも、いのちの平等と絆を感じとる意味でも、一度、10分で良いから、重い障がいのある人とお茶をする機会を持ちたいものです。

にじりゅう 始動

龍谷大学LGBTs交流サークル にじりゅう

にじりゅうとは

私たちにじりゅうは「多様な性を自然（じねん）に生きる」をテーマに、宗教部のバックアップを受けて2016年6月に結成されたサークルです。サークル名の「LGBTs」には、LGBT以外にも多種多様なセクシャリティがあって、一人一人がそれぞれのセクシャリティをもって生きているんだよ」というメッセージを込めています。そのため参加者をいわゆる「LGBT当事者」に限定せず、自分の性に正直でありたい人のための居場所や繋がりの中をつくることをコンセプトに活動を行っています。主な活動としては月に一度のペースで交流会を実施しており、これは各々でお菓子や飲み物を持ち寄って、最近あった出来事や悩みを語り合う、まとまりとした集まりです。また現在は、週2回ほどのペースでランチ会を実施する計画が進行

中です。

同時に、にじりゅうでは性の多様性について考える機会をより多くの人と共有したいとの思いから、学内で講演会などのイベントも行っています。2016年の11月には第1回目の講演会としてタレントで文筆家の牧村朝子さんをお招きしてお話をうかがいました。今後は半年に一度くらいのペースで講演会やワークショップなどを企画していきたいと考えています。

これらの活動を通して私たちは、性の多様性に関して当事者・非当事者という線引きはないことを伝えていきたいと考えています。私たちは無意識のうちに、女らしさ・男らしさに囚われたり、自分や他人にそれを押し付けたりしてしまいがちです。しかし、自己と他者、それぞれが自分らしく生きていくことを尊重することができれば、LGBTのひとたちとの間の壁だけでなく、なりたい自分

との間にあった見えない壁を壊すこともできるのではないかと、という希望があるからです。ここでは「LGBTのひと」や「それ以外のひと」ではない一学生としての思いをにじりゅうのメンバーに語ってもらいました。

Mさんの思い

どこでバイセクシャルという言葉を知ったのかはわからないが、大学生になってからは自分の性的指向はバイセクシャルだと言ってきた。自分自身にひどい言葉を投げかけられたことはない、もしくはあっても気付かなかったのだろう。日常生活に不自由はなかった。だが、世間からのバイセクシャルへの目は厳しい。ゲイやレズビアンよりも理解が進んでいないように思える。

ある時、「バイセクシャルは男でも女でもなんでもいいなんて変態だろ」という言葉を聞いたことがある。その会話の中ではバイセクシャルだけが大きく叩かれていて、そういうわれればニュースなどで取り上げられるのもLGBTなどとうたいつつバイセクシャル以外について語られることがほとんどだ。

元々LGBTサークルに入るつもりがなかった私がにじりゅうに入った理由は、やはり居場所がほしかったこと。もう一つは性の多様性に関する情報の発信ができるということ。あの時バイセクシャルを悪く言った人にも、

伝わるように。理解せずに批判する人がいなくなるように。私はこの居場所で声を届け続けていきたい。

Rさんの思い

私がにじりゅうに参加したのは、本当にたまたま、ご縁があったことです。LGBTとか、そういったセクマイ的なものに興味はあったけれど、どう向き合えばいいのか、みたいなことを考えることは今までありませんでした。特別なもの扱いする必要はないよね、とふんわり思っていましたし、今もそう思っています。

私は自分の好きになるもの、好きになる人で悩んだことはなかったんです。適当にお金を稼いで、好きなアイドルに夢中になって、適当な人と一緒になるなりならないなり。でも、ずっと一人はさみしいから猫でも飼おう、2匹ぐらい。

幸い私の生き方を咎める人は親も友達も含めていませんでした。でも、にじりゅうの活動の中で、自分の人生に寄り添うものを、自由に選ぶことすらままならない人に出会うことがあります。自分のあり方に悩んでいる人のリアルな声を聞きながら、私に出来ることってなんだろうかと、一緒に考えます。相変わらず何が出来るのかは分かりませんが、考えることは続けたいと思っています。



にじりゅうのマスコットの「たつちゃん」。

今後の活動は<https://nijiryujindo.com/>でも発信中！

一人ではない

このように龍大のキャンパスには一緒に声を上げたり考えたりすることのできる仲間がいます。そして私たちは活動を通じて、誰もが心地よく過ごせる社会への願いをより多くの人に届けていきたいと考えています。この願いを共有する宗教部・先生方など多くの理解者の方々の協力が、私たちの活動を支えてくださっているという事実は大きな希望です。一方で、キャンパス内で心無い発言を聞くことがあることも事実です。しかし、つらい気持ちになったときに、キャンパスにはたくさん

んの理解者たちもいるということを思い出してほしい、そんな願いのこもったZさんからのメッセージを最後に紹介します。

Zさんからのメッセージ

僕は、物心ついたときにはゲイだと自覚していました。正確には、中学生になる頃まで「ゲイ」という単語を知らなかったため、なんとなく男の子が好きだな…と感じる程度でしたが。思春期には例に漏れず様々な葛藤があって、将来の選択肢や、生き方について悩んだことも数多くありました。

ですが、大学に入ると同時に僕自身の世界が広がり、いろいろな出会いを経て、「僕には僕の生き方があっていいんだ」と思えるようにまでなりました。そんな中で、にじりゅうは僕にとって心が休まる場所です。普段の生活では周りに言いづらいことも、聞いてくれる仲間がいます。そういった「心の拠り所」が一つあるだけで、安心して大学生活を送れるんです。

なにも、にじりゅうだけではありません。この龍谷大学の中で、宗教部や保健管理センターなど、気持ちを受け入れてくれるところはたくさんあります。願わくは、このメッセージを読んでいるあなたが、自分のことを素直に語れる場所を見つけられますように。

龍谷大学におけるセクシュアルマイノリティの現状とニーズに関するアンケート報告

宗教部課長 安食真城

このたび、セクシュアルマイノリティの現状やニーズを把握し、誰もが安心して学び働くことができる環境作りと、龍谷大学の人権施策の推進を目的としてアンケートを実施しましたので、その概要と結果を要約して報告します。

実施主体 龍谷大学人権問題研究委員会
事務局 宗教部
期 間 2016年11月9日～12月8日
回答方法 大学ポータルによる無記名回答
対象者数 龍谷大学の学生及び教職員
回答者 858人（学生710、教職員148）

回答者の状況

回答総数は858人でした。学内限定のWebアンケートで、これほどの回答数があるとは予想

しておらず、セクシュアリティ（性のあり方）に対する関心の高さがうかがわれます。「出生時に戸籍や出生届に記録された性別」、「自認している性別」、「好きになる性別」の3項目の結果は、性のあり方が本当に多彩であるということに気づかせてくれます（表1）。

仮に「出生時の性と自認する性が男性で、好きになる性が女性」、および「出生時の性と自認する性が女性で、好きになる性が男性」と回答した人以外を、セクシュアルマイノリティとするならば、全回答者858人のうち220人が該当します。

その一方で、該当する220人のうち90人が、「LGBTの当事者ではない」と回答しています。このため、本アンケートでは「出生時の性と自認する性が一致し異性を好きになる人」および「LGBTの当事者ではないと回答した人」以外をセクシュアルマイノリティ

の「当事者」として集計しました。セクシュアリティとは、分類に当てはめて考えるのではなく、本来「その人自身がどう考えているか」ということを基準に考えるものであると言えます。また、学生の中には「自認する性」や「好きになる性」がわからないと回答した人が多く、自らのセクシュアリティが定まっていない人や、揺れ動いていて決定・判断できていない人が多いのではないかと推測できます。

セクシュアリティに関する嘲笑的言動や差別的言動について

学生から嘲笑的言動や差別的言動を受けたことや見聞きしたことが「よくある」「ときどきある」と回答した人は、当事者では5割近くにのぼりましたが、非当事者では2割以下にとどまり、逆に「まったくなく」と答えた人が4割を超えていました。

この結果から、当事者はこの問題に敏感で嘲笑的言動や差別的言動に気づきやすいが、非当事者は嘲笑的言動や差別的言動を聞いていても気づかない、または差別的と考えていない、あるいは気づいていても無関心であるということが考えられます。

具体的な状況やそのときの気持ちについて聞いたところ、「会話のネタ」として日常的に嘲笑的言動や差別的言動がおこなわれている

(表1) 回答者の状況

出生時の性	性自認	性的指向		出生時の性	性自認	性的指向	
女性	女性 452人	女性	13	男性	女性 9人	女性	3
		男性	319			男性	4
		性別を問わない・両性	63			性別を問わない・両性	0
		特定の人を好きにならない	24			特定の人を好きにならない	1
		その他	2			その他	0
	男性 2人	わからない	31		男性 368人	わからない	1
		女性	1			女性	319
		男性	0			男性	18
		性別を問わない・両性	0			性別を問わない・両性	16
		特定の人を好きにならない	0			特定の人を好きにならない	8
	Xジェンダー 4人	その他	1			その他	1
		わからない	0			わからない	6
		女性	0		Xジェンダー 3人	女性	1
		男性	0			男性	0
		性別を問わない・両性	2			性別を問わない・両性	1
		特定の人を好きにならない	0			特定の人を好きにならない	1
		その他	0			その他	0
	その他 1人	わからない	2			わからない	0
		女性	0		その他 1人	女性	0
		男性	0			男性	0
		性別を問わない・両性	0			性別を問わない・両性	0
		特定の人を好きにならない	0			特定の人を好きにならない	1
	わからない 13人	その他	1			その他	0
		わからない	0		わからない 5人	わからない	0
		女性	1			女性	0
		男性	1			男性	0
		性別を問わない・両性	6			性別を問わない・両性	4
		特定の人を好きにならない	2			特定の人を好きにならない	0
		その他	0			その他	0
		わからない	3			わからない	1

の実態が浮かび上がりました。また、「異性愛者を『普通』と呼ぶことに違和感を覚える」といった声や「ある学生が『私は同性愛者だと間違われたくない』と言ったとき、その言い方には同性愛者への嫌悪があると感じた」というコメントがあるなど、非当事者が自己中心的な意識や、無知、無関心によって嘲笑的・差別的と気づかずに発言していることが

多いようです。そのような会話を聞いて「すごく悲しいし、やっぱり自分は居てはいけないんだ」という違和や自己否定を感じたとするコメント、「カミングアウトしようとは思わなくなりました。個人的なことは話さないでいます」など、友人と素直につきあえないことを訴えるコメントも複数件ありました。また、「その場のノリで一緒になって笑って

しまった。良くはないと思いつつ曖昧に流してしまう」など、モヤモヤした気持ちを持ちながら、その場を取り繕わざるをえない状況も見受けられます。

教職員からのセクシュアリティに関する嘲笑的言動や差別的言動もあることがわかりました。具体的なコメントで目立ったのは、「男は男らしく、女は女らしく」や「女性は結婚して子どもを産むもの」といった固定観念にもとづく発言です。これらはジェンダー（社会的な性差）の意味合いが強くセクシュアリティとは少し視点が異なるかもしれませんが、多様な生き方や性のあり方への配慮が必要であることは共通しています。また、授業中に、教員が「同性愛は病院に行けば治る」や、トランスジェンダーは「性癖が歪んでいる」という誤った発言、「ホモは気持ち悪い」「ホモは無理」などの発言があったとするコメントがありました。教室には当事者がいることが普通のことですから、授業中などの教職員の嘲笑的言動は重大な人権侵害となります。

龍谷大学内でのカミングアウトの状況

カミングアウトとは、自分のセクシュアリティを告白することを指します。必ずしななければならないことはなく、必要性を感じていない人もいます。しかし、カミングアウトの状況を知れば、誰もが自分らしく過ごせる環

境になっていくかどうかを知る手がかりになるのではないかと考えました。当事者に該当する人で、誰にもカミングアウトしていないという人は130人中58人でした。集計の結果から、カミングアウトしたくてもできない人が多く存在することが考えられます。自由記載のコメントからも「カミングアウトできないと思った」などの記載があり、それを裏付ける結果となっています。カミングアウトしやすい環境、そして本来ならば、カミングアウトという言葉が必要がない環境こそが、誰にとっても安全なキャンパスであるといえます。現状では、積極的にカミングアウトしている人がいる一方で、多くの人はカミングアウトに慎重にならざるを得ない状況にあると言えます。

大学で困っていること、改善してほしいこと、期待すること

この項目は、自由記載でしたが、合計87件のコメントがありました。どれも大変貴重な意見で、これからの施策の参考になるものです。多数のコメントの中から、特に多かった意見や具体的な提案などを記載します。

●セクシュアルマイノリティ・フレンドリーな大学としての姿勢を明確にすること

「LGBTフレンドリーであることを明確

に打ち出すことで、大学としての姿勢を明らかにする」という意見がありました。龍谷大学では、「人権に関する基本方針」の中で、セクシュアリティによって差別しないことを明確に定めています。より積極的に推進していくためには、一部の大学や企業において発表されている「ダイバーシティ宣言」などを策定し「大学の姿勢を示すべき」という提案です。ただし、「大学トップや大学職員に理解がないと、学生もそれを薄々感じ、差別発言をしやすい」「大学の取り組みは遅いと感じる」との意見があるように、姿勢を示すだけでなく、強い指導力や実行力を求める声もありました。

●授業、講演会、ガイダンスなど、まずは理解を深めるための取り組みを進めること

セクシュアリティに関する講演会の開催や授業に期待する声が多数ありました。「セクシュアリティについてもっと知りたい」「性の多様性を知ってほしい」「生きづらさを感じている人がいることを知ってほしい」というのがその理由です。コメントの中には「どのような言動が当てはまるのかわからない」「友人のなかに性的少数者だと私に打ち明けてくれた人はいません。嘲笑や差別的言動も何の問題となるのかわからず、もしかししたら無意識のうちにそれらにあてはまる言動を私

は発しているかもしれません」というものもありました。まずは理解を深めるための取り組みが求められているということでしょう。また、新入生オリエンテーションやガイダンスなどのように、より多くの人が参加して学ぶ機会を望む声もありました。

●気軽に話せるコミュニケーションづくりや相談窓口を明らかにすること

学生の相談先としては、学生部に設置された「なんでも相談室」があるものの、セミナーのカウンターのため、相談しづらいというコメントがあります（なんでも相談室では、申し出ていただければ、個室に移動して相談を受けることも可能です）。また、相談とまでいわないまでも、「話を聞いてほしい」というニーズがあり、情報交換や「おしゃべり」ができるコミュニケーションを望む声があります。学生の自主的活動グループとして、LGBTs交流サークル「にじりゅう」がありますが、これにすら参加できない人もいます。指摘もありました。自らのセクシュアリティを迷っている学生がいることから、互いに共感し会える居場所づくりや、機会の提供などが期待されています。

●性別に関係なく、誰でも使えるトイレを設置し、その場所を明確にすること

性別に関係なく誰もが使える、いわゆる「ジェンダーフリートイレ」を設置してほしいという意見が多数ありました。ジェンダーフリートイレは、おもに「出生時の性と自認する性が同じでない人」が気兼ねなく利用できるよう、「だれでもトイレ」「みんなのトイレ」などの名称で公共の場での設置が広がっています。龍谷大学では、多くの身体障がい者用トイレや多目的トイレを、男女トイレとは別に設置しています。現在、建築中の大宮学舎東翼でも、設計時から「ジェンダーフリー」を意識したトイレの設置を予定しています。これらのトイレの表示や配置マップを作成することで、気軽に利用できるようになる可能性が考えられます。

なお、ジェンダーフリートイレは、あくまで選択肢の一つであり、本来は、男性用トイレを使うか、女性用トイレを使うか、ジェンダーフリートイレを使うかということは、本人が決めることであって、他人が外見で判断することではないということを認識しておく必要があります。

●その他の具体的な要望や提案

トランスジェンダーなどの人への配慮として、さまざまな提出書類の性別欄をなくす、学籍簿や学生証の性別を戸籍上の性ではなく本人が希望する性別で登録することができ

ようにする、健康診断を個室で受けられるようにする、新入生のフレッシュャーズキャンパスやゼミ旅行などの宿泊室を配慮する、授業や課外活動での更衣室を個室にする、セクシュアルマイノリティに理解がある企業に就職できるよう視線を強化する、これらの配慮をホームページに掲載する、などの意見がありました。また、ハラスメントに関する記載も多く、「ハラスメント防止規程にLGBTQや障がい者への差別禁止を盛り込む」とする提案などがありました。

まとめ

龍谷大学における、セクシュアルマイノリティの現状として「だれにとっても安全なキャンパスであるとは言えず、生きづらさを抱えている人がいる」ということがわかりました。そして、その生きづらさは、多くの場合「他者が無意識や無自覚のうちに発する言葉や振る舞い」によって引き起こされています。人間関係や社会性を維持しようとすることに付随して、こういった差別が生まれてしまうということ、マジョリティを含めすべての人が自覚しなくてはいけないことを多くの自由回答が語っています。

龍谷大学における、セクシュアルマイノリティのニーズは多様で多岐にわたりますが、もっとも多かったのは「多様な性のあり方を

理解し、生きづらさを抱えている人がいることを知ってほしい」ということでした。「大学で困っていること、改善してほしいこと、期待すること」についてのコメントには、講演会や研修会、ガイダンスの実施など、理解浸透のための取り組みに期待する声が多々寄せられました。

龍谷大学は、人権に関する基本方針の中で「龍谷大学のすべての構成員は、人権侵害が意図的な行為だけでなく無知や無関心、想像力の欠如によって生じることを常に意識するよう努めます。そして、自ら差別に加担し他者を傷つけている可能性があることの自覚をもち、人権問題に真摯に取り組む姿勢を持つとともに、一人ひとりの多様性と価値を尊重し、偏見や固定観念、差別意識の克服に向けて、主体的に取り組みます。」と明記しています。この基本方針にしたがい、多様性を認め合うキャンパスと社会の創造を目指して取り組むことが急務であると結論づけることができます。

アンケート結果の詳細は、龍谷大学のポータルサイトや宗教部のホームページに掲載しています。また、お問い合わせは宗教部までお願いします。

<http://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/>

龍谷大学

人権に関する基本方針

(2016年6月23日策定)

建学の精神と人権

龍谷大学は、親鸞聖人の生き方に学び、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間の育成を願い、教育と研究を行っています。それは、心身を苦しめる迷いから逃れられず、自分のみを善しとするものの見方から離れ、阿弥陀仏の願いに生かされて自と他が互いに深い縁で結ばれていることに気づかされる生き方として、建学の精神に謳われています。

本学では、その具現化の方策の一環として、1961年に人権に関する授業科目を開講して以来、人権教育、人権研究、人権啓発などを通じて人権尊重の文化の醸成を推進してきました。しかし、一般社会では既知の人権問題に加え、これまで認識されてこなかったさまざまな人権問題が表面化しています。私たちは、これらの人権問題に迅速に対応し、建学の精神にもとづき、他者への同朋としての温かい眼差しと、生かされ恵まれている喜びを持つことのできる人間教育に全学をあげて取り組まなければなりません。

身近な人権課題に向きあう視点

本学は、2万人を超える学生や教職員のほか、さまざまな関係者によって構成されています。言い換えれば、人種、民族、国籍、ルーツ、宗教、信条、社会的立場、年齢、性別、セクシュアリティ、障がいの有無など、多様な人が、自由に学び、働き、行動し、交流するコミュニティであるといえます。一人ひとりのつながりによって成り立っているコミュニティにおいて、差別し排除しようとすることは、人であることを否定することです。

残念ながら、身近な社会においてさまざまな人権侵害があとを絶ちません。例を挙げると、学校でのいじめ、インターネットでの誹謗中傷、職場でのハラスメント、家庭での暴力(DV)、子ども虐待、さらには街頭でのヘイトスピーチなどがあります。さまざまな人権侵害を克服するためには、加害者だけの問題として済ませるのではなく、加害者を取り巻く社会構造や背景、つまり社会が抱える問題認識とそれらを解決するための取り組みが欠かせません。

人権の問題や差別は、意図的な行為だけでなく、無意識のうちに自己中心の見方によって引き起こされることにも注意を向ける必要があります。たとえば、人の個性は一人ひとり違っていて、性のあり方も多様です。その理解が不十分で、画一的な観念や固定的な性別役割に囚われていると、知らず知らずのうちに相手を傷つけることがあります。無知や無関心、そして多数者への迎合による「無意識の差別」についても、その自覚と克服の努力が必要でしょう。

人権を考える理念

1948年の国連総会で、すべての人間の自由と尊厳と権利の平等を謳った「世界人権宣言」が採択されました。1966年には、加盟国を法的に拘束する「国際人権規約」が採択され（日本は1979年に批准）、その後も、「人種差別撤廃条約」（1965年）や「女性差別撤廃条約」（1979年）、「子どもの権利条約」（1989年）、「障害者権利条約」（2006年）など個別的な人権条約が採択されています。また、「日本国憲法」は、「すべて国民は個人として尊重される」（13条）と定め、個人の生は国家や他者の道具ではなく、自分らしく生きることに自体に価値があることを認めています。さらに、アジア太平洋戦争の加害と被害の経験から、平和的生存権を掲げ、個人の尊厳を平和と一体のものとしています。

人権の理念は、すべての人が自分の生き方を主体的に描き、自己成長をめざして協働し、社会参画するパワーを輝かせようとするものです。また、だれも排除しない、個人の尊厳を大切にする社会、多様な価値観を尊重し、固有性を活かしかう社会を目指すことにあります。

見えにくい差別に対しても鋭敏な感覚を醸成し、自己を平等に見ようとする眼差しを涵養することが、私たちの責務です。一人ひとりの力は弱くても、より良く変えていこうと努める姿勢を示し続けるからこそ、人権が尊重される社会に向けた最も重要な実現過程だといえます。

本学は、すべての人が平和に共存し、連帯する社会を目指して、ここに「人権に関する基本方針」を策定します。

人権に関する基本方針

龍谷大学は、建学の精神である浄土真宗の精神を具現化する取り組みのもと、平和を希求し、基本的人権と生命の尊厳を守り、人種、民族、国籍、ルーツ、宗教、信条、社会的立場、年齢、性別、セクシュアリティ、障がいの有無などにかかわらず、本学に関わるすべての人が差別やハラスメントなどの人権侵害を受けることなく学び、働き、関わり合えることを保障します。

龍谷大学は、基本的人権を尊重した環境の整備と、社会的に不利な立場にある人への支援・連帯を推進するため、人権理論の研究、社会的な変化や新たな人権問題に関し、情報収集に努め、本学における人権保障にかかる諸施策の検証と改善、教職員への研修、学生への教育・啓発を継続的に実施します。また、人権保障のための体制の整備に努め、取り組みを公表します。

龍谷大学のすべての構成員は、人権侵害が意図的な行為だけでなく無知や無関心、想像力の欠如によって生じることを常に意識するよう努めます。そして、自ら差別に加担し他者を傷つけている可能性があることの自覚をもち、人権問題に真摯に取り組む姿勢を持つとともに、一人ひとりの多様性と価値を尊重し、偏見や固定観念、差別意識の克服に向けて、主体的に取り組みます。

龍谷大学および龍谷大学のすべての構成員は、教育、研究など、あらゆる機会において人権保障にかかる諸課題を明らかにし、諸活動や成果の発信を通して、人権を尊重する文化と差別のない社会づくりに貢献します。

「障害者差別解消法」が施行されて一年になろうとしています。これは、国連の「障害者権利条約」の批准にもなつて制定された法律であり、障がいのある人が、「特別な人」ではなく、「ただの人（シンプリー・ヒューマン）」として、さまざまな社会・経済・文化活動に「ごくあたり前に」参加し、個性を発揮していけるよう、差別的処遇をせず、かつ個々に応じた必要な調整を進めよう、としたものです。

条約では、そのような必要な調整をしないことは、差別的処遇と同様の「差別である」と定義しています。ただし、その調整のために、金銭も含めて、「不当な負担」や「不均衡な負担」が生じる場合は、「合理的に説明がつく」ので、「ごめんなさい」ということができる、と定めているのです。

そして、この法律は、差別をする人をやつつけるための法律ではなく、障がいのある人とコミュニケーションを積極的にとつて、障がいのある人の個々のニーズをつかみ、環境整備や調整を進めていくためのものです。配慮や調整が不十分だと気づけば、率直に謝って改善していけばよいのです。

わたしたちの心の中に有る障壁は、障がいの重い人は、福祉施設に入るのが当然。障がいの軽い人は、社会の片隅にいて当然」という既成概念です。

障がいのある人と共に生きるには、この概念を脱して、ありのままの私とあなたに誇りを持ち、「市民としての権利回復」に取り組んでいくことが求められます。

たとえば、日本自立生活センター自立支援事業所所長の小泉浩子さんは、脳性マヒのため、小中学校時代、「汚い、きもい、お化け」と言われ、前歯を全部折られるいじめにあい、「私がダメだからいじめられても仕方ない」と思い

■編集を終えて

ありのままの私とあなたに誇りをもつ

加藤 博 史
人権問題研究委員長

込んでいました。それが、28歳で自立センターの仲間と出会い、「自分を悪いとは思わない、自分から逃げない、隠れない、おかしいと思ったら、人として見てくれ」と声に出す」ことを決意し、自分をダメと思い込ませていた社会の価値観を変えようと行動するようになりました。

ありのままの自分に誇りを持てるようになるためには、このような仲間（セルフヘルプ・グループといいます）がきわめて重要です。本誌座談会の「障がいの固定観念を解き放つ」の記事は、その意味でたいへん示唆に富んだ魅力的なものです。

障がい者アートも、障がいのある人がありのままの自分を表現し、社会への貢献感をもたらし、生活の質を豊かにするものです。「私は私」の主張に関しては、セクシュアル・マイノリティについても同じことが言えます。そしてここでも、セルフヘルプ・グループが重要な役割を果たしています。「にじりゅう」はその活動の意義を伝える報告です。

近年、「発達障害」に専門的な光があたり理解が進むようになつたのは良い事です、少し変わった言動があると直ぐに「発達障害」のレッテルを貼る傾向も進んでいます。

『基準』となる人々に合わせた社会は、『基準』でない人々の暮らしにくさ、負担のうえになりたっている。』とは、京都市内で発達障がいのある人の医療に携わっている医師・有井悦子氏の言葉です。

レッテルで人を視ないことと共に、基準となる人々に合わせた管理的で不寛容な社会を、「私は私」の意志とセルフヘルプ・グループの力で、多様性を活かした社会に変えていきましよう。それがすべての人にとって生きやすいヒューマンな社会創りの大きなパワーになることでしょう。



「白色白光」

「白色白光」という言葉は『仏説阿弥

陀經』に「池中蓮華 大如車輪 青色

青光 黄色青光 赤色赤光 白色白光

微妙香潔」とあり、本紙の表題にふ

さわしいということで命名しました。

これを口語訳しますと、次のようになります。

池の中に咲く蓮の花は、車輪の如く大きい。例えば青い色の花は、青く光り輝いており、黄色い花は黄色く光っている。赤い色の花は、赤く輝いて咲き匂い、白い色の花は、真つ白に輝いて咲いている。その各々の花は、微妙であり、妙なる色合いであり、その香りたるや、芳しく清らかである。

世の中には、青い色の花として輝く人もあるでしょうし、あるいは白い色で輝く人もあるでしょう。このように、私たち一人一人は、それぞれの母の胎内から生まれ、尊い生命を恵まれた、かけがえない存在なのです。

「白色白光」には、お互いがお互いを尊重しあいながら、自分だけにしか出せない美しい輝きでもって咲き匂って欲しいという願いが込められています。

「白色白光」第19号

2017年3月1日発行

編集 龍谷大学人権学習誌編集委員会

(入澤 崇／長上深雪／加藤博史／佐々木大悟／妻木進吾／上 英之)

発行 龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

☎075(642)1111(代)



草にすわる

わたしのまちがいだった

わたしの まちがいだった

こうして 草にすわれば それが わかる

八木重吉（やぎ・じゅうきち）

一八九八年、東京都に生まれる。東京高等師範学校を卒業し、英語の教師となる。二十七歳のとき、詩集『秋の瞳』を刊行する。「草にすわる」はそこに収録されている（一部、現代の仮名遣いに直した）。この他に代表作としては「心よ」「うつくしいもの」などがある。結核のため、二十九歳で死去する。

本詩にあるように、人は自身のなかに「まちがい」を認める瞬間、逆説的だが、積み上げていく知識とは異なる「知」が芽生え、新しい地平が開けてくる。